

被災土蔵の実測を続けて ——クラの看取りは誰がするのか？

Field Survey of DOZO (Warehouse with Earth Walls) Affected by the 3.11 Tohoku Earthquake: Documentation of the Historical Architectures Destined to be Dismantled by Public Expense

渡邊義孝

Yoshitaka Watanabe

一級建築士、尾道市立大学非常勤講師／
1966年生まれ。千葉県立船橋高校卒業。
保線工、型枠工等を経てアユミギャラリー
入所。04年独立。住宅設計の他、文化財調査、
民家再生等に従事。NPO 尾道空き家再生プ
ロジェクト理事。著書に『風をたべた日々』、
共著に『セルフビルド——家をつくる自由』。

蔵だけが残る荒野で

私が東日本大震災の被災地を訪ねたのは、2011年7月でした。

文化財レスキューのお手伝いに行ったのですが、バスの窓から見た光景が、その後の私の方向性を決めました。それは、地震と津波と大火に見舞われた荒野に、ポツポツと蔵だけが残る、そんな光景でした。大槌でも、釜石でも、気仙沼でも石巻でも、土蔵・石蔵だけが焼け残り、敢然と大地に建っていたのです。

一般の木造家屋と比べ、土蔵は重く、また、柱も密で流されにくい。土壁は燃えない。屋根まで水没しても置き屋根がなくなっても躯体は残ることがある。

痛々しい姿ではあるけれど、それは盗難と天災に耐えるという蔵の目的が「発揮された」姿と言える。そんな蔵が、修理費用

の巨額さゆえに次々と解体されているという報道に接したのはその直後でした。

何層にも塗り重ねられた土の壁や鏝絵や扉の掛子の修復には高い左官技術と長い時間、多額の費用がかかります。「土蔵の4面を塗るだけで2千万円」という新聞記事がありました。さらに追い打ちをかけているのが「期限付き公費解体」というシステムでした。「期限までに申請すれば行政が壊してくれる。廃棄物処理もタダ」というものです。もちろんこれは重要な被災地復興のメニューであり、これなくしては全壊・半壊の建物の所有者は復興への歩みを踏み出すことはできなかったでしょう。しかし、「もしかしたら直せるかも」というかすかな思いを、公費解体制度が断ってしまったという事例がたくさんあることも事実なのです。

本当なら保存を呼びかけたいのですが、

被災地ではそれは困難です。絶望的な状況で苦渋の選択として解体を決断された方がほとんどだからです。私にできることは、ただ黙って実測し写真を撮り、それを記録に残していくこと、建物が壊される前に、伝統技法の結晶である蔵が誇らしく建っていたという証しをせめて残そう、そのために現地に通い続けよう、と決意しました。

蔵の調査のハードル

しかし、土蔵の調査は簡単ではありませんでした。

蔵は「他人の立入りを許さない」空間であったからです。

宝物がいまもある家ならば当然、そうではなくて雑然と散らかったままの場合も、他人に見せたくはありません。

ある土蔵では「おじいちゃんがデイスービスに出かけてから調査を始めてくれ。他人が入るのを見たら激高してしまうから」と言われたことがありました。

蔵というのは、かくもデリケートな空間なのです。だから、調査には現地コーディネータが必須です。幸いにも私は、石巻では郷土史家、また気仙沼では遠洋漁業の社長さんという人望の厚い協力者に恵まれました。彼らが、被災した蔵をあらかじめリスト化し、所有者に承諾を取っ



図1 石巻市の石蔵の立面図

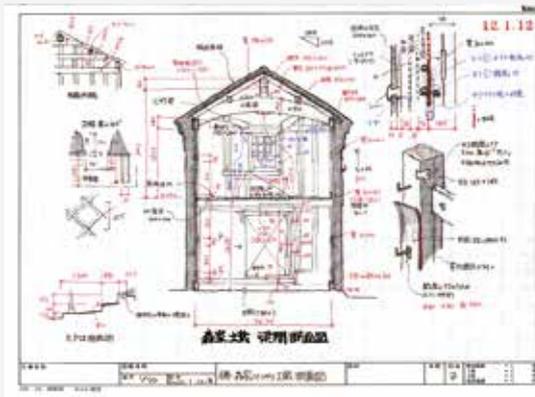


図2 石巻市の土蔵の断面図(現存せず)



図3 石巻市門脇地区で奇跡的に残った本間家土蔵。その後、寄付金などにより修復された。



図4 気仙沼市の土蔵の内部(現存せず)



図5 大正時代の土蔵から発見された1対の雛人形

てくださったのです。だから私は、その尽力のうで効率的に調査をすることができました。

現地から「ようやく中を見ていいという許可が取れたよ」という連絡が来たり、「来週解体されるという報せがあった。今週なら間に合う」という電話で駆けつけたこともありました。多くのボランティアも無償で駆けつけました。そうして調査できたのは石巻・登米・気仙沼の3市で合計30棟余になりました。その大半は直後に解体され、もうすでに存在しません。図面は写真と共に簡単にレポートにして、所有者に届けています。

土蔵とは何か

ここで、蔵とは何か、を整理しましょう。蔵は倉庫です。でもただの物置ではありません。イエにとってかけがえのない家財や文書、産物をストックする場所です。中には畳を敷いて、クラザシキとして起居することもあります。

蔵をつくるのはとにかく手間がかかります。壁の土を塗っては数カ月乾かして、また塗ってを繰り返す。その土だって、半年や1年あるいはそれ以上前から粘土を捏ねて糞を混ぜ発酵させる必要がある。装飾性が高いものには鍍金が付き、白よりも黒漆喰の、それも顔が映るほどの磨き仕上げだとさらに手間賃は高くなります。しかし、それを再現できる左官職人はほとんどいないと言われています。

人間が住む主屋よりも長く時間をかけ、場合によってはより多くの予算をかけて建てる、それが蔵なのです。だからイエに

とって、家長にとって蔵は特別なものであり続けたのでしょう。私が蔵に惹かれるのは、それだけではありません。地域性のかたまりだからです。瓦の色、壁土の色、そして石の色。それはまさに「国土の歴史的景観」にはかならないと思います。

眠りから覚めた雛人形

建物調査では棟札探しが重要です。建築年や施主、棟梁の名が記された「出生証明書」だからです。

三陸沿岸の蔵では、棟札は鳥の巣箱ほどの大きさの「雛箱」とよばれる木箱の中に格納されているケースがほとんどでした。

雛箱には、棟札のほかに、頭髮、櫛・剃刀・鏡などの化粧道具と共に、1対の雛人形が納められていることが多かったのですが、これは船大工の伝統儀礼である「船霊納め」に似ています。東北地方では、船を進水させる前に棟梁が帆柱の下に「雛人形と船主の妻の頭髮とサイコロ等を封入する」といいます。雛たちは1センチにも満たない真っ白な顔に、穏やかな笑みを浮かべたまま、長い時代を眠っていたのでしょう。子孫繁栄とイエの安泰を祈った先人の想いが、一つひとつの蔵に詰まっていたのです。

また、高い技術で知られる気仙大工の集団が、石巻・登米などでも普請に携わっていたことが棟札から確認できました。

豊かさ、イエの矜持、職人の卓越した技術、木材・土・石など地場産の建材、そして、人形や祈禱文に込められた人々の祈り……土蔵はほかのどんな建物にも劣らぬ「土地の物語」そのものであると、私は

思います。「土地の物語」は、これからの復興にとって、もっとも大切なもののひとつになるはずですが、もし公費解体が避けられないのだとしたら、せめて尊厳を持てる「看取り」がなければなりません。その謙虚さを、現代の建築界が放擲しているはずはありません。

実測図面(野帳)に書き残した建物たちの、そのほとんどはすでにありません。解体された数に比べればわずかではありますが、それでも記録保存がなされたという事実は小さくないと思います。それは、所有者の方々の記憶のなかにしまわれるでしょう。そして、いつか、誰かの目に触れることなのでしょう。そのときに、図面は新たな意味を持つことなのでしょう。

「記録されたもののみが記憶される」(宮本常一)という言葉のとおり。



図6 解体予定土蔵の実測プロジェクトを伝える2012年2月16日付『石巻日新聞』